

アフリカの光

丸山健二



アフリカの光

丸山健二

河出書房新社

アフリカの光

昭和四十九年三月十日 初版発行
昭和五十年六月二十日 三版発行

定価は帯・カバーに表示してあります

著 者 丸 山 健 二

発行者 中 島 隆 之

印刷者 草 刈 龍 平

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三の六
電話東京(292)三七二一番(代表)
振替 東京一〇八〇二番

(乱丁・落丁本は本社またはお買求め
の書店にてお取り替えます)

印刷・中央精版 製本・若林製本

©1974 Kenji Maruyama Printed in Japan

目次

アフリカの光	5
闇の中の黒犬	69
影のしたたり	109
ましらの肖像	175

ア
フ
リ
カ
の
光

ア
フ
リ
カ
の
光

☆

その連中がしたたか酔っぱらっているのは、間違ひなかった。

大勢の男たちにとり囲まれながら、私と友人はまだ決めあぐねていた。たしかに人数だけは向うのほうが多く、ざっと数えてみたところでも八人はいた。しかし、これしきの手合ならほとんどの問題はなさそうだった。彼らのなかにはちゃんと立っていられない者が幾人かいたし、海での仕事が多まりそうにない貧弱な体つきの者もいたし、老人さえまじっていた。

それに引き換え、私たちは一滴の酒も呑んでおらず、たつぷりと眠った直後でもあった。おまけに腹ぺこで、気分はむしゃくしゃしていた。たとえ相手が全員そろって胴巻のなかから手鉤をひっぱりだして襲いかかってきたとしても、負けない自信はあった。万一勝てる見込みがないとわかったときには、逃げればよかった。

だがすでに私たちは、こういった類いのたいした裏付けもない喧嘩にはこりごりしていた。完全に勝った、見事に勝ったと思えるような愉快な殴り合いでも、あとになってよくよく体を調べてみると、あざや傷がたくさん見つかり、そして一晚経つと身動きするたびに節々が痛むのだった。

傷はともかく、警察の厄介になるのは真つ平だった。一度私たちは町の警察署でさんざんな目にあわされていた。私たちがどの船の乗組員でもないことがわかると、警察の態度は一変し、まだほかにも何かやっているだろうとしつこく訊いてきた。私も友人も黙っていた。喋らないのが一番だと考えてそうしたのだが、そのために頭を小突きまわされ、挙句に一晚泊められてしまった。翌朝警察署を出て行く私たちに向って、連中は口々にこう言った。働く気持があるなら、どの船でもかまわないからさっさと乗ってしまえ、と。また、こうも言った。いつまでもうろうろしていると、今度は本当にぶちこむぞ、と。

あれから一ヵ月近く経っていた。この町の駅に着いた日から数えれば五十日あまり経っていた。しかし、依然私たちの心は定まっていなかった。二、三の船にあたってみるだけはみたのだが、結局乗らなかった。収入が噂で聞いたよりはるかに少ないのが、その理由だった。しかもどの船も北の海へしか行かなかったのだ。

春になればもっとうまい話があるかもしれない、そう考えて私たちは、とにかく四月を待っていた。私たちが行きたいのはアフリカの海だった。もっとも生活費を稼ぐために、イカ釣り

船には何度か乗っていた。いずれにしても、私たちの本当の生活は四月の向うに、遠洋漁業専門の船が行くはるか彼方の海にあるはずだった。金色に輝く海岸線と、青々としたうねりと、鯨がうようよ……。

連中は酔っぱらっていた。それは間違いなかった。私たちには殴り合っても負けない自信があった。だが、この町の様子に詳しくなかったふたりは、用心深くなっていた。これが素通りするだけの町なら問題はなかったのだが。

私も友人も知っていた。仮に今、眼の前ですごんでいる男たちをたたきのめしたとしても、明日になればきっと彼らは大勢の仲間をひき連れてくるにちがいがなかった。小さな町だった。どこへ隠れようと、その気になりさえすれば一時間もかからないで、彼らは私たちを見つけられるだろう。また、肩がぶつかったとか、顔を睨んだとかの口実をいちいちまともに相手にしていたら、この町では毎晩喧嘩をしなければならぬことも知っていた。

酔ってはいいても、連中は明らかに私たちを恐れていた。いつまでも逃げださない私たちを気味わるがって、進んできつかけをつくろうとする者はひとりも現われなかった。その路地には彼らのほかにも大勢酔っぱらいがいたし、ただの通行人も何人かいたが、こつちを注目している者はなかった。見物人が集まるには、実際に、それかなり派手な殴り合いをはじめなければ無理だった。そんな町だった。

私はやろうと決めた。睨み合っている状態に疲れてきた。早いところけりをつけて食事をした

かった。うまくゆくかどうか見当もつかなかったが、私は試してみた。この手は以前にも使つて成功したのだ。半コートのポケットに右手を突っこむやいなや、最もしぶとそうなひとりに向つて二歩、三歩と進み出た。とっさに友人が私を真似て、同じ仕種をした。私が言う前に、友人が言った。刺し殺してやつてもいいとか何とか言いながら、彼はポケットに入れた手をぐつと突きだした。すかさず私は更に一步前へ出て、半コートのなかで真つすぐに伸ばした人差し指を相手の脇腹に押しつけた。

たいした効き目だった。おれたちを甘くみるなよという友人の言葉が無用なくらいだった。

● 私たちに直接威された男は、小声で謝ると呆気なくひきさがってしまった。代りにえらく威勢のいい少年が私たちの前に立ちはだかつてきたが、友人の平手打ち一発で退散した。

連中は後を振り返りながら、港の方へのろくさと歩いて行つた。脇腹を小突かれた男が、私たちのポケットの中味について仲間に説明しているらしかった。彼らの姿が見えなくなるまで、私と友人は右手をポケットから出さなかった。

私たちは笑わなかった。人差し指一本で大勢の男たちを追つ払つたことを、愉快に思つたりしなかった。ふたりとも毎日苛立っていた。この町へきてからというものは、声を出して笑つたことなど一度もなかった。私たちとしてはかなり思い切つてここへやってきたのに、とつくに南の海へ向つていなければならないのに、未だに魚臭くて薄汚ないこの町を抜け出せないでいたのだ。

その路地をはさむ建物のお大半が、漁師相手の呑み屋だった。屋台もあったし、小料理屋もあったし、バーもあった。バーの前にはかならず女が立っていて、通行人に声をかけていた。まだまだ寒かった。風が路地を吹き抜けるたびに、薄着の女たちは電柱の蔭や扉の後ろで足踏みをした。だが、男がひとりでも立ちどまろうものなら、たちまち店の奥から何人もの女が現われて強引にひっぱりこむのだった。

さほど長くもない、せいぜい百メートル足らずの路地なのに、喧嘩はあちこちで見られた。

三人の警官がせわしく走りまわって、仲裁に努力していた。彼らはできるかぎり仲裁で事を解決しようとしていた。私たちの前にポリバケツが飛んできて、ゴミがあたり一面に散らばった。野菜のくずやら魚の腹わたやらがネオンの光を浴びて、原色に染まった。

市場へ集まるトラックの運転手を利用する店で食事をすませてから、私たちはふたたび路地へ戻った。金はもういくらも残っていなかった。二日以内にイカ釣りの船に乗らなければ、アパートの部屋代はむろん、タバコにも不自由するありさまだった。しかし私も友人も、その話に触れないようにしていた。イカ釣りに行こうと言いださなかった。

この寒さに夕方から夜明けまでしぶきをかぶっての仕事は楽ではなかった。乗るたびに後悔して、何度もこれが最後だと言ったものだ。船から降りて金をもらおうとしても、手がかじかんで受けとれず、ポケットへ押しこんでもらうことも珍しくなかった。そして、寒さを忘れるためにがぶ呑みした酒が頭に残って、そのあと二日間はずアパートで唸っていなければならな

った。

一本のタバコを交互に喫いながら、私たちは黙りこくって路地を歩いた。昨日と同様、あてなどなかった。パチンコ屋の前を通ったが、横眼で睨んだだけだった。パチンコはこのところ三日たてつづけに負けていた。そうかといって、アパートへ戻るには時間が早すぎた。あの部屋へ帰ったところで、私たちには眠るよりほかにすることがなかった。眠るのはもうたくさんだった。昼間ずっと眠っていたのだから。

いつしか路地の外れにさしかかっていた。面白いことはひとつもなかった。警官たちは相変わらず喧嘩の仲裁に懸命だったが、血を見るほどの殴り合いはまだなかった。

どのバーでも酔っぱらいが出入りし、女たちがいかかわしい声を張りあげ、古くなったネオンがあぶら蟬みたいに唸り、ありとあらゆる音楽がごちゃまぜになって飛び散っていた。

路地の外れで私たちは、暗い港を、ついで半島を、燈台を、それからもっと遠くにある夜の黒い海を眺めた。その夜、船の灯は入江のなかにしか見られなかった。私たちは並んで小便をした。小便が砂地に落下する音に耳を傾けながら、同時に海の音も聞いていた。それは遠くの音だった。はるか彼方の、目下のところ私たちには無縁な、だがじっとしてはいられない音だった。

私はうっかりイカ釣りの仕事の件を喋ろうとして、途中でやめた。友人の口から言わせるほうが無難だった。もし彼が明日にでも乗ろうと言えば、私は反対しないつもりだった。イカ釣

りも春になるまではやむを得なかった。だが、おそらく彼にしても同じ考えだったろう。彼もまた私が言いだすのを待っていたのだ。

そこで私は、どうしようかと訊いてみた。どうしようのなかにはいくつもの意味をこめた。

このあとどうやって時間を潰すかと、金の件と、更にはいよいよ四月になったときの具体的な計画についてと。

四月になれば本当にうまい話があるかどうか、確かめていたわけではなかった。二、三軒のバーで、しかも酔っぱらった漁師や女たちから聞いた噂だった。女たちは口をそろえて太鼓判を押した。春になったらアフリカから冷凍船が帰ってくる。それには魚がどっさり積みこまれているし、一年間向うで働いた男たちが乗っている。そして、すぐにまた交替の男たちを乗せてアフリカへ行くのだが、いざ出港の日が迫ると欠員が生じるのはおきまりだ。ふたりくらいなら即座に雇ってくれるだろう。もっとも、立派な会社の船なら、行きも帰りも飛行機で運んでくれる。

私たちはジェット機で送り迎えしてくれるという会社へ出かけてみた。しかし、先方の返事は、「人手は五年先まで間に合っている」だった。

バーの女たちは忠告したり、唆したりした。やめておけばいいのと言ったかと思うと、どっさりお金をもらったらここへきて遊んでくれと言ったりもした。

私たちはまったくついていなかった。万事がひと足ちがいで狂ってしまった。もう三日早く

どの町へきていたら、もっと安いアパートを借りられたらうえに、イカ釣りより簡単な仕事にもありつけたのだ。しかし私も友人も、諦めて帰ろうとはしなかった。春になってからあらためて出直してきてもよかったのだが、とどまって待っているうちにはかならずうまい話があるが、りこんできて、どうにかなるだろう、運をつかめるだろうと信じていた。ところが、依然私たちはどうにもなっていないかった。そして、もはやあとにはひけなくなり、期待はしほみ、体が妙にだるく感じられるようになった。

そうだ、私たちはたしかに疲れていたのだ。待ちくたびれて、うんざりしていたのだ。いつまで経っても慣れない寒さもそれに拍車をかけていた。一日中どこにいても冷たい風につきままとわれた。雪の降る日が少なくなったとはいえ、風の勢いは衰えず、強弱のむらこそあってもべつ吹きまくっていた。海がしけて、よほどの大型船でなければ出港できなくなった日などは、町の人々は家に閉じこもって一步も外へ出ようとせず、あたりはひっそりとして風だけが暴れまわっていた。

そんな日には、私たちも部屋にいた。腹這いになって布団をかぶり、枕の上に顎をのせ、窓越しに見える入江に長いこと眼をやっているのだった。栈橋のどれにもちっぽけな船がびっしりと繋がれており、灰色のしぶきをかぶりながら大揺れに揺れていた。はげしい風に煽られて斜めに降る粉雪の向うには、カラスの脚のような形をした細長い半島が横たわり、その突端にはぼんやりと燈台が見えた。見たくもない光景だった。私たちが望んでいる眺めではなかった。